二葉亭四迷全集 第八卷

二葉亭四迷全集

第八卷

昭和四十年四月二十六日　第一刷発行　©

草稿・雑纂一

定価四〇〇円

著者　二葉亭四迷

東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
発行者　岩波雄二郎

東京都板橋区板橋四丁目四七番七号
印刷者　白井知一

発行所　東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三　株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

三陽社印刷・松岳社製本

目次

「平凡」草稿その他

「平凡」草稿……七
草稿(雑)……六六
わからずや(ツルゲーネフ)……九七
露助の妻……一三四

雑纂

女丈夫傳敍……一五六
ツルゲーネフ『父と子』(虚無黨氣質)
春廼家朧助譯冷々亭杏雨譯豫告文……一五六
FRIENDSHIP……一五七
安心論……一五八

露西亞小說にあらはるゝ地名、人名、官等、身振……一五九
嫉妬する夫の手記……一六一
國木田獨歩「牛肉と馬鈴薯」の一部露譯……一七一
曾我兄弟能狂言……一七一
埃……一七一
「世界語」の獻辭……一七二
旅日記(東海道線)……一七二
盜難告訴……一八〇
經歷書(草稿)……一八二
情願書……一八四
情願書……一八五
住所錄……一八七
遺言狀……一九三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

善後策……一九三

露　文

雑　纂

嫉妬する夫の手記……一九六
國木田獨歩「牛肉と馬鈴薯」の一部露譯……二二一
曾我兄弟能狂言……二三〇
埃……二四五
「世界語」の獻辭……二四七
「落葉のはきよせ二籠め」表紙裏書込み……二四八
「平凡」露文プラン……二四九
露西亞文書簡の草稿……二五〇

日記・手帳

遊外紀行……二五六
明治三十七、八年（手帳十四）……三一二
明治三十八、九年（手帳十五）……三一五
明治四十年……三三〇
明治四十一年……三四七
明治四十二年……三八五
發病當時體溫日記……四一三
解　説……四一七

「平凡」草稿その他

「平凡」草稿

清ちやんのポチを愛しかることは言語に斷えたり、椽の下にさんたら法師を敷きて之をポチの寢間と定めたれど、日曛れて雨戸を差すと、人を戀しかりて啼出せば、内では清ちやんもベソを作りて一晩泣明かすに、流石の父さんも我を折りて、當分を條件にして座敷で育てることにしたれば、喧ましき泣聲は罷みたれど、其代り尿をそこらに垂流すに持餘し、坐敷より卸さうと云へば、清ちやんが承知せず、叱る、泣くといふ世話場があつた上、遂ひに夜たけは玄關の土間へ寢處（ママ）へ設けてやり、清ちやんが玄關の二疊に臥て、啼けは顔を見せて賺すことに極めたれど、これは實際に行はれず、畢竟清ちやんが自分の寢とこへ引入れて抱て眠て、尿をされ、初は自分の粗匆にして濟みたれと、其次に露現し、又卸すと言はれるがつらさに、夜一夜まんじりともせず、少しむづ〳〵すると、スグ土間へ卸して尿をやらせるほと、產みの親もかうまではと思はるゝ程の丹誠を僅か十二か十三の子供のするに、〔原稿中斷〕

半分を姿か見えねば、取つて置いてやるほどにすれば、ポチもいつしか人間癖がついて、人間の食ふ物は何でも食ふやうになり、餅菓子なんど二三錢位は一人でペロリとやつて了ふやうになり、清ちやんの貰ふお小使は大方ポチが食うて了ひけり、其後次第に大きうなるにつけ、椽側に上り下りすること甚しく、家の内は始終泥土たらけなるに、さして奇麗好ではなき阿父さんもこれにはほと〳〵閉口し、一大改革を斷行して、遂にポチは地下の犬になり下りたれど、其頃はポチも大きくなりたれば聞分けたのか、それとも夏の事故、結局すゝしくて好いと思つたか、左程人を戀しかりもせざりければ、それより以後は遂に地下の犬とそなれりける。

地下の犬となつたけれど、尙ほ毎朝一度清ちやんの床を出るを待ちかね、清ちやんの聲かすると、必ず座

舖へ駈上り來て、清ちやんの肩へ兩足をかけ、長い舌でペロ〳〵と面を嘗めると、清ちやんは嬉しさうに嘗めて貰つてゐるのが例となり、此病たけは如何に叱つても改まさりければ、清ちやんの起る時は障子を締め、唐紙を占めて警戒を嚴にして僅かに之を防けり

かく愛せられるので、ポチの性質も自ら大樣育ちて、第一人といふものは皆賴もしきものに思ひて之を恐るゝ所以を知らず、誰れ彼れの差別なく我家へ來る人あれは、尾掉りて之を喜ひ迎ふる、其樣決して尋常のお愛敬に非ず、心から人多く來りて、家門の賑かなるを欣ふ風あり、

清ちやんは毎日學校より歸ると、まづカバンを其處へ投出して、おやつの餡パン三つばかり懷に捻込み、ポチの首環に紐をつけて之を引き、內から半町程距てた原ッぱへ走りて其處でポチと競走をやり、さて草原に打倒れて懷の餡パンをポチと二人して食ひ、さて又一遊ひして家に歸るを常とせり

されはポチは毎日午後になりて清ちやんの歸る樂しみにしてゐたれど、段々大きうなるに惡智惠がつき、清ちやんの歸るを待兼て、垣根の根を掘つて、其下を潛り、往來へ飛出して其處らを彷徨き廻はるやうになり、これが清ちやんの大心配となり、種々工夫して外へ出られぬやうにすれば、ポチも種々工夫して外へ出る算段をし、遂には外遊ひが常となりて、家て些とも餓しい思ひをさせねど、近所の掃溜を饗ることもあり、お隣の孃ちやんに巫山戲て之を泣かせ、近所の子に連れられて遠遊ひにも出掛け、いつしか胡散らしい紙屑屋を見れば吠え付く事も覺えたので、清ちやんの心配は大方ならず、明けても暮れてもポチの事で、小さき胸を痛めたり

ポチ

或日の事なり、學校より歸つて來ると、いつもなら、横町の角あたりにチョコナンと坐つて待つてゐ、清ちやんの姿を見るより、飛て來て飛つき、其眼には嬉し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

笑ひを含みて大騒きをやるところなれど、今日は其影たに見えず、されど此頃はかうした事珍らしからねば、また何處へか遊ひに行つてゐるなと思ひはながら、只今と阿母さんの前に手をつき、ポチはと問えば、阿母さんは知らぬと云ふ、そんなら探して來ると、起上ればまゞお待ちと言はれて不思議に思ひ、とうしたのと問返せば、阿母さんはいひそゝくれながら、ポチは見えなくなつたと云ふ、ハッと顏色を變えて犬殺が來たかいと云へば、さうではなけれど、遊ひに出たまゝ晝になつても姿を見せぬ、御飯を拵らへて置きたれど今たに歸つて來ぬ、いつもこんな事はないので不思議に思ひ、酒屋の御用に聞いてみたら、お晝ごろ此方のポチを何處からのそ〔缺〕

ポ　チ

ポチといふな犬の名なんだ、僕が弟のやうに可愛かつてゐた犬の名なんだ。

僕あこれの事を憶出すと、何だか今でも胸が一杯になつて、かう人間が厭になつ了ふ。合の子で額を脊中に二タ處ばかり墨汁を叩付けたやうな白斑があつて、耳の押立つた、面のしやくンだ、上顎より下顎の方が出張つてるので下の齒か始終露出しになつてる、ヒョットコ面の道化た犬たつたから、愛嬌は有つたけれ〔原稿中斷〕

母さんは吃驚して目を丸くしたッけ。

〔缺〕云つて可かわからないから、羽織の紐をいぢくつてニヤ〳〵笑てゐると、父さんが何たつて問くもんだから、到頭お母さんが代つて言つてくれたの。父さんは初は勉强の邪魔になるから不可てッてたけど、僕が今までよか十層倍勉强するからて、其前から約束の靴を買つて貰へなくたつて好いからッて賴むと、母さんも如何せこの子は其内に何處かで又外のを拾つてくるだらうから、飼つてやつた方か善と云つたもんだから、お父さんも到頭澁〻承知してくれた。

二

母さんは仔細を聞いて、可とも不可とも言はなかつた。まア、お父さんに伺かつて可いと仰しやつたら、トいふ條件付で略納得したやうだから、僕も安心して、庭に放して、母さんにねたつて御膳を喰べさせたが、未だ能く喰べることを知らないで、これには母さんも困つた、僕も困つた。それから又お粥を拵さへやつたら、初め二三度鼻をつッこんで、むせて、〔原稿中断〕

僕の父親さんは一体犬や猫を餘まり好かないもんだからね。

三

それからねえ、君、僕か非常に苦勞したんだ、ポチを育てるについて。初ての晩なんざ、僕あ終宵(よがら)寢なかつたぜ。椽の下へ炭俵を敷いて、その上へ寢かしておいたんだけど、クン〳〵〳〵泣いてばかゐるンたもの。お母さんを探すンだね。それがさも〳〵悲しさうで、僕あ其聲を聞くと何だかかう淋しいやうな、心細いやうな、厭な氣持になつてね、若しか僕のお母さんや、お父さんがフイ居なくなつたら如何なだらうと思ふと、何だか急に悲しくなつて僕も到頭泣ちやたんだ。お父さんはいつも晩にお酒を飲むんだ、飲むといつでも大きな鼾をかいて寢て了ふもんだから、其時も寢てゐたけれど、お母さんは犬の啼聲か耳について眠られないッて、右を向いたり、左を向いたりしてゐたッけが、僕の容子が變だもんだから、眼を明いて「お前如何お爲だッ」お腹でも痛いのかッていふから、うゝむ、然うぢやないけど、ポチがかわいさうで〳〵ならないンだと譯を話すと、お母さんは「先ァ此子はッ」て姑らく何にも云はなかつたが、其内にお父さんも眼を覺したものだから、お母さんが其話をすると、お父さんはそれからいろんな事を言つたッけ、何でもそれだから親の云ふ事を聞かなきや不可ッて。僕はいつも云はれる事たけれど、其晩に限つて何たか妙にお父さんの言ふ事か身に染みて、僕あ心からお父さんお母さんに孝

行しなきならないと思つたッけ。

ポチはいつまでたつて啼いてゐるので、お父さんは肝癪を起して明日は棄て了へッてつたけど、お母さんが、これが彼樣に可愛さうたつて云つてるンだから、そんな仰しやるなッて、なためてくれたもんだから、お父さんも默つて了つて、其内に又大きな鼾をかきだす。お母さんも其内に寢入つて了つた。ポチはクン〳〵云つて、段々聲が枯れて一しきりパッタリ啼罷了つたから、垣根でも潜つて那處へ行ちやつたぢやないかと思つて、窃と起つて雨戸を明けて見ると、好い月夜だつけ。椽の下を窺いて見ると、ポチは居た。丸くなつて炭俵の上に寢てゐたつけが、僕が窺くと、むッくり首を抬げて、急に嬉しさうにヨチ〳〵驅出。

僕は窃と抱上げて内所て頰邊を押付けた。ポチは小さな尻尾を振つて僕の頰邊をペロ〳〵嘗めたッけ。そりや不潔いさ。不潔いことは僕も知つてるけれど、だつて、君、ポチは嬉しかつて嘗るンだもの。今までお母さんを戀しかつ〔以下缺〕

初戀

初戀と題を置いたら、又しても例の葷物語かと先潜りして、そこらに眉を顰める人もあらうけれど、是はさら〳〵左うした浮きたる沙沙にはあらず、清ちやんとて今歳十二の惡戲盛りの、戀の相手はポチといふ飼犬なり、といつてあられもない人間の而も幼けない身で畜生に戀をしかけた訳にはあらねど、好いたが戀の正體なら、清ちやんのポチに於ける、好いたも好いたも大に好いたので、此犬の爲なら命も要らぬと思ひ詰めたる幼な心を、戀とゆたとて仔細あらむやは。

さまて清ちやんの惚れ込みたるポチの犬ッ振を見るに、さして器量よしといふにもあらず、父も母も今は定かに分らねど、いつれ横町の魚屋の熊がお出入屋敷の秘藏のおベロに通つてそこの塀際に人目恥ちずざれ合うた浮氣のこれが記念らしく、狆式の志やくみ面で、チョッポリ鼻のポッチリ眼、長々と兩耳を垂れてお色

は眞黑けなり、何處をどうと取柄はなけれど、一體が小作りで圓うなつたら膝にも置くべく、起つたら清ちやんの腰に手が屆くべし、彼が清ちやんの家に引取られし初を尋ぬるに、ある年の春まだ淺く、冷たき雨の降る夜の事なり、宵から門をさしてねむき目を擦り〳〵燈火に明日の下讀みをしてゐると、忽ちいつくともなく小犬の啼く聲悲しげに聞えて、元來が活物好きの清ちやんの胸をむしりければ、堪へかねて徳と起つて襦子窓の障子を引開けると同時に、家内の灯影さと暗を破りて、狹き横町の濘るみを照せり、清ちやんが透してみるに向ふ隣りの杉垣の下に何やらむ黑き物の蠢くあり、熟と視れは、悲しきその主はこれぞと覺えて生れたまゝの小犬なり、まだ棄てられて間もないか、人なつこくて逃げもせず、反つて啼縋みてヨチ〳〵と此方へ歩み寄り、窓の格子に出されぬ清ちやんの面を瞻仰け、クン〳〵と鼻を鳴らすも愛らしく、早や拾ひ上けたきは山々なれと叱られる恐ろしく躊躇うてゐると、阿母さんの聲がして、清坊や、いつまでそんなものを見てゐるものでない、早く閉めて此方へお出で、今宵は雨が降る所爲か、滅切りと寒じますねと跡は阿父さんに言はれたのなれど、阿父さんは何やら書物に餘念なかりければ向の返事もなかりし、されど清ちやんは口でばかり應諾して、二度三度呼ばれて尙ほ却々來さうにもなきに、つひに阿父さんの小言となりて、しやうことなしに窓を離れ、寢よと言はるゝまゝ、臥床へ潜つたれど、母や戀しき、兄や慕はしき、又啼立つる小犬の聲が耳について、なか〳〵寢付かれず、小さな胸は一杯になつて、果はしく〳〵と忍泣きに、熱き泪は夜着の衿を濕せり、阿母さんは流石に耳敏く之を聞つけて、何故の泪と異しめられて、思はずワッと聲を立て、彼犬を家へ入れてやつて言へば、夫婦目を視合せて、呆れられしが、大人しい子なれど、一こくの處ありて、かう言出してはいつかな承知せず、内外聲を併せて泣立つるに氣が弱い阿母がまづ我を折り、阿父さんは尙かにかくと澁らるゝを取做して、門の戸を引開けて、小犬を内へ砌はり入れ、物なと喰はせた

りしてみれば、流石にもう酷く追出されもせず、つひ其晩一晩啼き明かされて、小言も數々いひ盡した、其儘居びたりとなつてから今年で丁度丸二年、

清ちやんのこの二年間の丹精は筆にも紙にも盡されず、

〔以下餘筆ニテメモ〕

○ポチの病氣　○ポチの爲に人と喧嘩す　大の爲に咬まれんとす　○ポチの友人　○雪の夜のポチ　○夏の晝のポチ　○ポチと競爭　○隣家への心遣ひ　○ポチの惡戲（うさんなものに吠ゆ）　○その心配　○抱眠　○朝起きたる時　○學校歸り食を分つ　○ポチの性質、人の恐るべきを知らず　○他の犬の我食を奪ふを顧みず　○清ちやんを友視す　○清ちやんに對しては憤ることあり　○人間と殆ど同じ物を食ふ

苛めつ兒

［半ば無意識に］何となく惡いところを見付けた［と思つて、何かなしに］やうな氣がして、口から出任せに好い話があると言ふのを［鹽］［機會］に、駈け出したのだから、六ちやんと面を合せて見ると、いふ事がない……

六ちやんはといふのは［士族］坂下の花屋の子だ。其時十三で、僕とは三つ違ひだが、意地が惡くて、力が强いから、僕は始終苛められ通しだ。戸外へ出れば泣かせられて歸る、いつも相手六ちやんなので、母は此子を非常に憎がつてゐたけれど、憎い者には何とやらといふ諺があるとかで、憎がりながら、家へ遊びに來れば屹度何かしら食物をやつて、御機嫌を取る。六ちやんはそれを貰ふ禮も碌に言はないで、むしや〳〵喰べて、而して戸外へ出ると、矢張り僕を苛める。

僕は此子が大嫌ひだ。けれども、苛められるのが辛いので、六ちやんの言成次第になつて、何と言はれて

も逆はぬ。それどころでない。懷に［貰つたばかし］樂しみにして取つて置いたパンでもあれば、なけなしの一つでも、强求られん中に、此方から出して遣つて御機嫌を取る。そんなにしても矢張り苛められるので、僕は六ちやんの前へ出ると、猫に逢つた兒のやうに、恂々ばかしてゐる。

善い話しが有るといふので、六ちやんは的切りまたパンでも貰へることと思つたらしく、［立止まつては］一寸立止つて、僕の駈寄るを待兼ねて、

「好い話しツて、何だい？」ト故と突慳貪に云ふ。

「あの、あの、あの……」

「何だい？」トもう苛め口調になる。

「あの、あの……」ト僕は切齒詰まつて、「ちやん家へ遊びに行かないか？ 皆でボールをやつてるツさ。」

「何だ詰らねえ、ボールなんぞ！」と六ちやんは非常に失望したやうで、「俺らこれから……町まで使ひに行んだ。お前も一緒に來ねえ。」

幼年青年過渡時代

其頃の私に取つては尤も［百年も忘れ難いと思つた］傷心の事の有つた後は、私はしばらく無事の浮世を送つた［毎日學校］から、別に記すべき樣の事はない。

［頓て中學時］此間私の家は四谷へ移轉し、麹町へ轉し、其後に神田に引越したが、神田［へ引越してから］に居る時、某中學へ入つて、それから私の中學生活がはじまつた。

父は餘り私の教育に干渉しなかつたから、私か學校で如何な事を習つてゐるかは、能く知らなかつたらしい。唯毎日怠らず學校へ通つて、試驗に及第すりや、それで文句は無かつたから、私も試驗に［さへ］及第す［りやそれで好い事と思つてゐた。］ることばかりを心掛けて、其他の事は、些とも心配しなかつた。［又父も其が學生の本分のやうに言つてゐたのみならず、凡そ私の家に出入する親類縁者や父の知己朋友など皆］私は元來小心の質だから、他の級友のやうに糊塗す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb